

共同研究室

昭和60年度第3回研究会（6月21日）

▶ テーマ 「労働価値論と現代」

報告者 上野俊樹氏

報告内容

マルクスの投下労働価値論はもっとも単純に理解すれば、リカードウ的に理解されたもの、すなわち、ある商品の価値はそれを生産するのに要する労働時間によって規定される、というものである。しかし、『資本論』では、この単純な投下労働価値論は生産価格論によって修正されている。自由競争段階の資本主義の価格現象は生産価格論によって投下労働価値論として説明された。

ところが、今日の価格現象は生産価格論的な労働価値論では説明できない。その理由は、第一に、生産価格論の内容でもあり、その前提でもある経済的関係の側面の変化による。自由競争段階の資本主義とは、リカードウのいうように「数百の企業が自由に競争する」ような経済的関係を前提としていた。独占段階では、こういう経済的関係は存在しない。この点で、生産価格は独占段階では失効している。第二に、価値規定の量的側面をなす商品の価値量はその現象形態である価格現象を通じてどのようにマルクスの投下労働価値論から説明されるかという問題を考えた場合に、生産価格論的な方法では説明されえないからである。

独占段階の価格現象は、独占価格、インフレ現象、サービスの提供する商品の量的増大、需給関係によってその価格が規定されるかにみえる商品（たとえば、株式など）の増大として現われており、この現象の生み出すイメージが人びとにマルクスの労働価値論に対する疑念を増加させ、近代経済学的思考の「正当性」を信じさせる一定の傾向をもたらしている。マルクスがリカードウの価値論と格闘したように、マルクス経済学の研究者はこの問題と格闘し、労働価値論の今日的発展を考える必要がある。

以上の立場から、この問題について考えてみたのがこの報告である。その内容は、『経済』1985年5, 6, 7, 8月号に「労働価値論と現代」(①～④)という論文で発表したので、関心ある読者にはそれを読んでいただくことにして、ここでは報告の主な論点を項目として提示しておきたい。

一 価値法則をみちびく経済学の方法

- 1 リカードウの「個別適用の方法」とマルクスの展開の方法
- 2 外部からの機械的な価値法則の侵害
- 3 剰余価値法則による価値法則の侵害
- 4 資本にたいする制限としての価値法則

- 5 限界と制限の弁証法
- 二 『資本論』の経済法則の基本的内容
 - 1 価値法則
 - 2 剰余価値法則と資本の蓄積
 - 3 利潤と生産価格
 - 4 商業資本と利子生み資本
- 三 『帝国主義論』の経済法則の基本的内容
- 四 労働価値論の現実的妥当性——その基礎的考察
 - 1 経済的關係
 - 2 価値形態と貨幣の必然性
 - 3 単純な投下労働価値論とその対象
 - 4 独占の形成と独占価格・独占利潤
 - (1) 独占利潤とその源泉
 - (2) 独占資本の供給操作による収奪
 - (3) 生産費による価格決定
 - (4) 剰余価値法則の展開形態としての独占利潤法則
 - 5 「価値を生産しない商品」の価格
 - (1) 価格だけをもつ商品と価値論
 - (2) 需要・供給関係によって価格が決定される商品
 - 6 インフレーションと価値収奪
 - (1) 管理通貨制度
 - (2) 財政インフレ
 - (3) 信用インフレ
 - 7 金・ドル交換停止下での不換通貨
 - 8 利子生み資本の形態での収奪
 - 9 投機的現象の一般化
 - 10 総括——価値法則にたいする侵害と反発

昭和60年度第4回研究会（7月5日）

報告者 布川日佐史氏

▶ テーマ DGB '81年基本綱領と西ドイツ労働組合運動